

# 反社会的行動・精神的健康の先行要因としての 社会的情報処理・自己制御

—疑似相関の可能性の検証—

吉澤 寛之<sup>1</sup>

Social information processing and self-regulation as common antecedents of antisocial behavior and mental health: Revealing the possibility of a spurious relationship

Hiroyuki Yoshizawa

This study examined the influence of social information processing and self-regulation on the relationship between antisocial behavior and mental health as common antecedents of these social adjustment indices. A total of 299 undergraduates completed questionnaires measuring these indices. Positive and negative aspects of social information processing were assessed using social rule appropriateness, normative beliefs about aggression, and cognitive distortion scales. Self-regulation was assessed using the Social Self-Regulation scale. Mental health was assessed by the General Health Questionnaire and subjective well-being. Antisocial tendencies were assessed using participants' experiences of delinquent behavior during high school years. Hierarchical regression analyses revealed that mental health indices had no significant effects on antisocial tendency after controlling for social information processing and self-regulation. The results of structural equation modeling confirmed that social information processing and self-regulation had direct and indirect effects on both antisocial tendency and mental health indices. These findings provide evidence that social information processing and self-regulation created a spurious relationship between antisocial tendency and mental health problems. Future research should include longitudinal investigations and younger samples under junior high-school age.

**Key words:** social information processing, self-regulation, antisocial behavior, mental health

子どもを取り巻く環境の教育力低下を背景に、社会の安全を脅かす凶悪な犯罪や非行は減少しつつも高い水準を保ち続けている（法務省法務総合研究所，2011）。特に，少年による一般刑法犯の人口比は，他の年齢層と比較し格段に高い値を示しており，この世代に対する対策が急務とされている。こうした若年者の反社会性を特徴づける要因として，社会認識の問題としての社会的情報処理の誤りや歪み，利己的行動をコントロールできない自己制御能力の低下が存在していることが推察される。平成17年版犯罪白書では，少年院教官の60%以上が，最近，非

行少年の抱える問題の中身が変化していると感じており，多くの教官が“人に対する思いやりや人の痛みに対する理解力・想像力に欠ける”，“自分の感情をうまくコントロールできない”といった非行少年の資質面での問題を指摘している（法務省法務総合研究所，2005）。こうした指摘は，現代の反社会的行動の特質に，社会的情報処理や自己制御能力の問題が存在することを裏付けている。

実証研究においても，社会的情報処理に問題がある場合，反社会的行動を含む様々な問題行動を行う傾向が高まることが確認されている（e.g., Crick & Dodge, 1994; 吉澤・吉田，2004）。社会的情報処理アプローチでは，個人が周囲の環境から受ける社会的情報を処理する

1 本研究の調査の実施において三重大学名誉教授の西川和夫先生，データの入力において田研出版株式会社にご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

過程において、各ステップを細分化し、攻撃行動や社会的不適応行動に至るまでの各ステップにおける処理のエラーやバイアスが検討されている（詳細なレビューはCrick & Dodge, 1994）。さらに、自己制御能力の欠陥についても、反社会的行動だけではなく（原田・吉澤・吉田, 2009）、多様な問題行動に影響する（e.g., Baumeister & Vohs, 2004）ことが確認されている。

社会的情報処理と自己制御はともに社会的適応を予測する社会化要因として取り上げられることが多く、反社会的行動を予測する上での心的過程に着目した概念として、その理論的、実践的な有効性が指摘されている（Zelli & Dodge, 1999）。また、親や仲間集団などの近接的な環境要因や、社会や文化といったマクロな環境要因が、反社会的行動に影響を及ぼす過程を説明する上で、媒介的役割を果たす重要概念とされる（Dodge & Pettit, 2003）。

両者の関連には、社会的情報処理が自己制御を因果的に先行するという知見も得られている（e.g., 吉澤・吉田・原田・海上・朴・中島・尾関, 2009）。因果的先行性を踏まえた上で、情報処理の問題を修正することで反社会的傾向を改善させる可能性を見出すなど（吉澤・吉田, 2007）、これらの要因における問題や欠陥の修正が反社会的行動の改善につながることも明らかにされている。

他方、反社会的行動に関する研究においては、こうした行動をおこなう非行少年の精神的健康を検討する研究が存在する。非行少年におけるストレスへのせい弱性を示す研究（藤野, 1996; Kim, Conger, Elder, & Lorenz, 2003）や、非行傾向行為と抑うつ傾向との関連を検証する研究（Harrington, Rutter, & Fombonne, 1996; 小保方・無藤, 2005, 2006; Young, Mikulich, Goodwin, Hardy, Martin, Zoccolillo, & Crowley, 1995）、精神的健康全般との関連を検討するため精神健康調査（General Health Questionnaire: GHQ）を青年犯罪者と非行少年対象に実施した調査（Ireland, Boustead, & Ireland, 2005）などがある。

藤野（1996）では、非行少年における日常のストレス反応と非行行為の実行直前のストレス反応との関連、非行行為の実行直前と直後のストレス反応の関連などが分析されている。結果として、非行行為を行うことでストレス反応が変化すること、日ごろの人間関係に関するストレスが非行経験に関連すること、日常のストレス反応が人間関係についての主観的なストレス（とくに両親との関係）やソーシャルサポートによる影響を受けることなどが確認されている。これらの結果から、人間関係を円滑に営めないことが非行少年のストレスにつながっていることが示唆される。

小保方・無藤（2006）では、中学生の非行傾向行為と抑うつとの関連について、ストレスとコーピングを考慮した検討を行っている。結果として、日常生活のストレスは、非行と抑うつの両方と関連しており、非行があり抑うつが高い子どもは、非行があり抑うつが低い子どもより、先生ストレス、親ストレスが高いことが示されている。また、ストレスが非行と抑うつの各々に与える影響について、構造方程式モデリングを用いた分析が行われている。分析の結果、日常生活のストレスは、非行傾向行為より抑うつに対しての方が影響力が強いことが明らかにされている。これらの結果は、非行少年の抑うつの背景には先生や親などの他者から受けるストレスが存在し、こうした人間関係からのストレスの受けやすさが非行傾向と抑うつとともに影響することを示唆する知見である。

Ireland et al. (2005) は、青年の犯罪者における精神的健康の低さの予測因としてコーピングスタイルの影響を検討するとともに、GHQを実施している。併せて、青年犯罪者（18歳から21歳）と非行少年（15歳から17歳）との比較も行っている。GHQに関する結果において、青年は少年よりも心理的苦悩をより感じており、成長とともに抑うつ、不安、睡眠障害の傾向が上昇することが確認されている。一方、適応的なコーピングスタイルを用いることで、これらの心理的苦悩は総じて減少するという結果も得られている。これらの結果から、非行の期間が

長いほど精神的健康が低下するものの、適応的なコーピングを行うことでこうした低下を防ぐことができる可能性が示唆される。

以上の非行少年対象に得られた反社会的行動と精神的健康との関連に関する知見より、両者の関連にはそれぞれをとともに規定する第3の要因の存在が想定される。人間関係を円滑に営むことを困難にし、適切なコーピングを阻害する社会化に関連した要因が、反社会的行動傾向と精神的健康との間に疑似的な関連を生み出している可能性が考えられる。間接的な傍証ではあるものの、小保方・無藤(2006)において、ストレスサーが抑うつを媒介して非行傾向行為に及ぼす間接的影響と、ストレスサーから非行傾向行為への直接的影響を仮定したモデル分析が行われているが、その結果においても抑うつと非行傾向行為には有意な関連が認められていない。

さらに、先述した反社会的行動と精神的健康との関連を検討した研究では、主に矯正施設の入所少年が対象となっている点が結果に影響している可能性がある。矯正施設はストレスフルな環境であり、そうした環境に身を置くことで、精神的健康が低下する可能性が高い。その結果、入所少年と一般少年とを比較することで、有意差が生じる可能性がある。

本研究では、反社会的行動と精神的健康の両者に先行する第3の要因として、社会的情報処理と自己制御を仮定した検証を行う。それぞれの概念は円滑な人間関係や適切なコーピングとも関連する要因であり、社会的情報処理は対人コンピテンス(e.g., Dodge, Pettit, McClasky, & Brown, 1986)、自己制御は対人場面における適応的な対処(e.g., Baumeister & Vohs, 2004; 原田・吉澤・吉田, 2008)に関連することも確認された社会化の程度を反映した指標である。青年期における比較的安定した社会的情報処理スタイルや自己制御能力を測定するため、本研究では、青年期対象の測定法であり、反社会的行動の予測力が確認されている社会的ルールの知識構造、認知的歪曲、規範的攻撃信念、社会的自己制御を測定する(原田他, 2009; 吉澤・吉田, 2004; 吉澤他, 2009)。

社会化指標として社会的情報処理と社会的自己制御、精神的健康の指標としてGHQおよびウェルビーイング、反社会的行動の過去経験を測定し、各要因間の関連を分析することで、反社会的行動と精神的健康の疑似相関の可能性を検証し、社会的情報処理および社会的自己制御による説明力を比較検討する。なお、本研究では一般大学生を調査対象とするが、その理由としては矯正施設等の入所経験がある可能性が非常に低く、中学生や高校生に比べて非行の経験についての報告を求めやすいことにある。

## 方 法

### 調査対象者

大学生300名を対象に、2回の講義時間において各質問項目への回答を求めた。有効な回答が得られた学生299名(男性152名、女性145名、不明2名;平均年齢19.69歳,  $SD = 0.93$ )を対象に分析を行った。

### 測定尺度

**社会的情報処理** 情報処理のポジティブな傾向を測定するため、規範意識の高さを反映する社会的ルールの知識構造を測定した。6種類の葛藤状況を提示し、各状況で用いるルールの回答を求めた。葛藤状況は、友人・知人との葛藤状況、社会的な場面での葛藤状況の2領域ごとに、“同意”、“好意期待”、“援助”に関する3状況を設定し、全6状況を提示した(“友だちと一緒に遊ぶことが決まっていたが、ちがう遊びがしたくなった(同意に関する状況)”など)。各状況で用いるルールに近い項目を、該当する数だけ予備調査(吉澤・吉田, 2003)で作成されたルールリスト(“その場をなごませる努力をする”など)から選択するよう求めた。規範意識の適切さとして、ルールの当該状況への適用における適切さである“ルール適切性”を指標化した。適切性得点にはリスト被選択項目に対し、予備調査で当該項目に付与された適切性得点を男女別に割り当てた全項目得点平均値を用いた。

情報処理のネガティブな傾向を測定するため、認知的歪曲尺度(吉澤・吉田, 2004, 15項目;

6件法), 規範的攻撃信念尺度(吉澤他, 2009)を用いた。後者は, 全体の項目数を考慮し, 下位尺度のうち一般的な攻撃行動を正当化する傾向である“一般攻撃信念”のみを測定した(8項目; 4件法)。

**社会的自己制御** Social Self-Regulation尺度(原田他, 2008)を用いた(“自己主張”, “持続的対処・根気”, “感情・欲求抑制”の各下位尺度からなる29項目; 5件法)。

**精神健康調査(GHQ)** GHQ(Goldberg, 1978)の邦訳版である日本版GHQ30(中川・大坊, 1985)を用いた(“一般的疾患傾向”, “身体症状”, “睡眠障害”, “社会的活動障害”, “不安と気分変調”, “希死念慮とうつ傾向”に各5項目の計30項目; 2件法)。

**ウェルビーイング** カリフォルニア人格検査(Gough, 1957)の邦訳版(我妻・川口・白倉, 1967)における幸福感尺度を用いた(44項目; 3件法)。

**社会的逸脱行為の過去経験** 吉澤・吉田(2004)の社会的逸脱行為尺度を用い, 各行為の高校時代の経験について回答を求めた(20項目; 5件法)。

結 果

尺度の検討

先行研究の因子構造を確認する因子分析を行い, 先行研究と整合的な因子構造が確認された。認知的歪曲尺度は, 先行研究において3因子が採用されているが, 全指標数の多さを考慮し, 1因子(9項目;  $\alpha=.82$ ; “自分を尊敬しない相手には, 仕返しぐらいしてもよい”など)を採用した尺度得点を算出した。規範的攻撃信念尺度は, “一般攻撃信念”(7項目;  $\alpha=.82$ ;

“いらいらしている時に他の人を押しのけたり, こづきまわすことは問題だと思いませんか”などの項目に問題ないとして正当化する程度を得点化)として尺度得点を算出した。Social Self-Regulation尺度は, 先行研究において反社会的行動との関連の低い“自己主張”を除き, 自己抑制傾向を表す“持続的対処・根気”(7項目;  $\alpha=.79$ ; “周りから決められた役割が困難なことでも, すぐにあきらめたりせずに, 我慢してやりとおす”など)および“感情・欲求抑制”(9項目;  $\alpha=.72$ ; “自分の思い通りに行かないと, すぐに不機嫌になる(逆転項目)”など)の2下位尺度得点を算出した。GHQとウェルビーイングは先行研究を踏襲した下位尺度得点を算出した。なお, ウェルビーイングについては, 下位尺度得点に逆転処理を加え, 高いほど適応的であることを示す得点にした。社会的逸脱行為尺度は, 先行研究で2因子が採用されているが, 認知的歪曲尺度と同様の理由で, 本研究では1因子(20項目;  $\alpha=.88$ ; “人をなぐったりけったりして, ケガをさせる”など)を仮定した“逸脱行為過去経験”の尺度得点を算出した。

各尺度間の相関

基礎的分析として, 社会化指標, 精神的健康指標, 逸脱行為過去経験の各尺度間の単相関係数を算出した(Table 1)。ルール適切性はGHQの睡眠障害や不安と気分変調, 希死念慮うつ傾向とに負の相関があり, ウェルビーイングとは正の相関であった。認知的歪曲は一般的疾患傾向や身体的症状, 希死念慮うつ傾向, 逸脱行為過去経験とに正の相関があり, ウェルビーイングとは負の相関であった。一般攻撃信念はウェルビーイングと負の相関, 逸脱行為過去経験と正の相関であった。持続的対処・根気は逸

Table 1  
変数間の相関

	一般的疾患 傾向	身体的症状	睡眠障害	社会的活動 障害	不安と 気分変調	希死念慮 うつ傾向	GHQ 総得点	ウェル ビーイング	逸脱行為 過去経験
ルール適切性	.00	.10	-.16*	-.09	-.15*	-.23**	-.13†	.28**	-.11†
認知的歪曲	.20**	.16*	.09	.06	.13†	.21**	.20**	-.42**	.25**
一般攻撃信念	.12†	.08	.08	-.01	.04	.03	.08	-.22**	.22**
持続的対処・根気	-.02	.03	-.13†	.08	.00	-.11†	-.03	.08	-.25**
感情・欲求抑制	-.11	-.18**	-.15*	-.04	-.22**	-.24**	-.23**	.44**	-.10
逸脱行為過去経験	.00	.04	.11†	.01	-.09	.07	.02	-.08	—

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , † $p<.10$

脱行為過去経験のみと負の相関であった。感情・欲求抑制は身体的症状や睡眠障害、不安と気分変調、希死念慮うつ傾向とに負の相関があり、ウェルビーイングとは正の相関であった。逸脱行為過去経験とGHQ下位尺度およびウェルビーイングとは有意な関連が認められなかった。

#### 逸脱行為過去経験を基準変数とした重回帰分析

本研究の目的である反社会的行動と精神的健康の疑似相関の可能性を検証するため、社会化指標を統制したうえで、精神的健康指標による逸脱行為過去経験の予測性を検討する分析を実施した。逸脱行為過去経験を基準変数、第1ステップで社会化指標、第2ステップで精神的健康指標を説明変数として段階的に強制投入した階層的重回帰分析を実施した (Table 2)。分

析の結果、GHQ総得点もしくはGHQの各下位尺度得点とウェルビーイングを第2ステップで投入した際の説明率変化量は有意な値とならなかった。一方で、社会化指標群の説明力は有意な値を示した。本結果から、社会化指標を統制したうえで、逸脱行為過去経験を予測する有意な効果が精神的健康指標群にはないことが明らかとなった。

個別の標準偏回帰係数を確認すると、認知的歪曲と一般攻撃信念は有意な正の影響、持続的対処・根気は有意な負の影響を有していた。一方、精神的健康指標群のなかでは、不安と気分変調に有意な負の影響が認められた。

#### 因果モデルの分析

上記の結果から、反社会的行動と精神的健康

Table 2

社会化指標と精神的健康から逸脱行為過去経験への階層的重回帰分析結果

	step 1	step 2	step 1	step 2
ルール適切性	-.03	-.03	-.03	-.03
認知的歪曲	.21 **	.21 **	.21 **	.21 **
一般攻撃信念	.14 *	.14 *	.14 *	.14 *
持続的対処・根気	-.21 **	-.21 **	-.21 **	-.19 **
感情・欲求抑制	.14 †	.14 †	.14 †	.13
一般的疾患傾向				-.07
身体的症状				.07
睡眠障害				.13 †
社会的活動障害				.07
不安と気分変調				-.24 **
希死念慮うつ傾向				.09
GHQ総得点		-.02		
ウェルビーイング		-.01		.00
$R^2$	.12 **	.12 **	.12 **	.17 **
調整済 $R^2$	.10	.10	.10	.12
$\Delta R^2$		.00		.04

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

Table 3

社会化指標から精神的健康への重回帰分析結果

	一般的疾患 傾向	身体的症状	睡眠障害	社会的活動 障害	不安と 気分変調	希死念慮 うつ傾向	GHQ 総得点	ウェル ビーイング
ルール適切性	.06	.17 *	-.13 †	-.08	-.11	-.17 *	-.06	.15 *
認知的歪曲	.20 *	.14 †	-.02	.04	.01	.09	.11	-.22 **
一般攻撃信念	.07	.01	.01	-.02	-.04	-.10	-.02	-.03
持続的対処・根気	.03	.10	-.08	.11	.08	-.04	.06	-.10
感情・欲求抑制	-.01	-.18 *	-.10	-.05	-.24 **	-.18 *	-.18 *	.32 **
$R^2$	.05 †	.08 **	.04 †	.02	.07 **	.10 **	.07 **	.28 **
調整済 $R^2$	.03	.05	.02	.00	.05	.08	.05	.26

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

との関連は疑似相関であり、ともに社会化指標の影響を受けて関連が生じている可能性が考えられた。そのため、社会化指標を説明変数、精神的健康指標を個別に基準変数とした重回帰分析を実施した (Table 3)。分析の結果、ルール適切性は身体的症状やウェルビーイングに有意な正の影響、希死念慮うつ傾向に有意な負の影響があることが確認された。認知的歪曲は一般的疾患傾向に有意な正の影響、ウェルビーイングに有意な負の影響があることが確認された。感情・欲求抑制は身体的症状や不安と気分変調、希死念慮うつ傾向に有意な負の影響、ウェルビーイングに有意な正の影響があることが確認された。

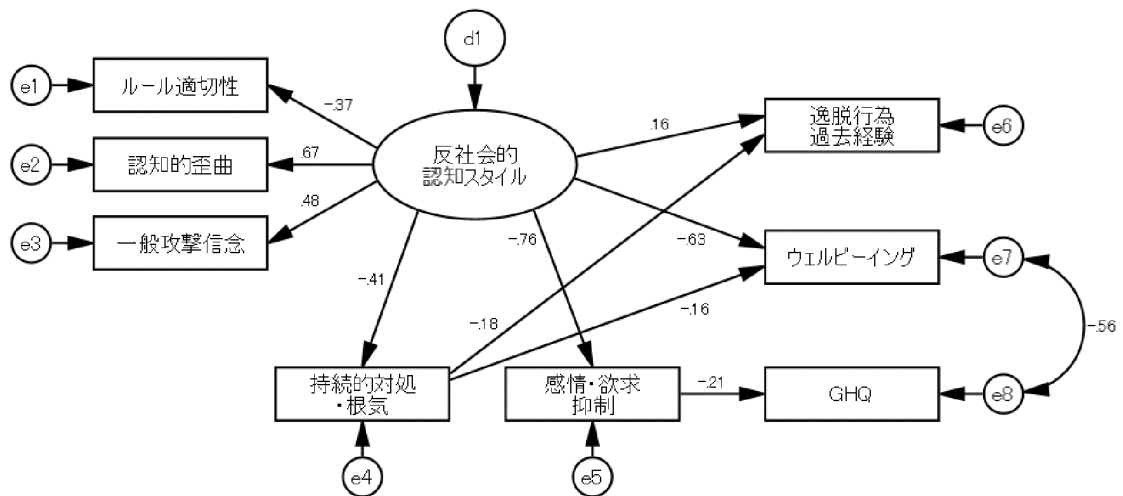
重回帰分析の結果から、社会化指標と精神的健康の間に因果関係があることが想定されたため、指標間の因果関係を整理するモデル分析を構造方程式モデリングを用いて実施した。社会的情報処理指標は相互に関連が強く、指標数も多いため、反社会的認知スタイルとして潜在変数を仮定し、GHQは総得点を用いて、これまでの分析結果から示唆されるモデルを構成した分析を行った。なお、欠損値のあるサンプルはリストワイズした。LM検定 (Lagrange Multiplier) とWald検定によりパスの修正を行い、最終的にFigure 1のモデルを採用した ( $\chi^2(17)=26.73, p=.06; GFI=.97; AGFI=.94; CFI=.97; RMSEA=.05; N=232$ )。なお、概念的類似性を考慮し、GHQとウェルビーイン

グの顕在変数には誤差に相関を仮定した。

モデルの各変数間の関連において、反社会的認知スタイルは主に社会的自己制御の抑制系の2側面に負の影響を及ぼし、特に感情・欲求抑制を阻害することが確認された。さらに、逸脱行為経験やウェルビーイングに直接的な影響を及ぼすと同時に、持続的対処・根気を介した間接的な影響を及ぼしていた。GHQへの影響に関しては、感情・欲求抑制を介する間接的な効果が確認された。

### 考 察

本研究では、先行研究で確認されている反社会的行動と精神的健康との関連が、ともに社会化指標により規定された疑似的なものである可能性を検証するため、これらの指標の相互関連を分析した。単相関の結果からは、社会化指標と精神的健康の各指標ならびに逸脱行為過去経験との間に複数の有意な関連が認められたものの、精神的健康と逸脱行為過去経験との関連は有意でなかった。さらに、つづく階層的重回帰分析の結果においても、精神的健康指標群の逸脱行為過去経験への影響はほとんど有意ではなかった。先行研究では矯正施設の入所少年を対象に精神的健康における問題が指摘されているが (e.g., Ireland et al., 2005), こうした知見は、非行と精神的健康とに直接的な因果関係はなく、施設に入所することの二次被害として



注) GHQ: General Health Questionnaire

Figure 1. 因果モデルのパスダイアグラム

精神的健康が阻害されている可能性を示唆するものである。一般中学生を対象とした小保方・無藤(2006)においても、非行傾向行為と抑うつとに関連は認められていないことから、二次被害の可能性は高いと考えられる。

階層的重回帰分析の結果では、逸脱行為過去経験に対する有意な説明力は社会化指標群に認められたのみであり、精神的健康指標群を第2ステップで追加した際の説明率の有意な上昇はなかった。こうした結果から、本研究で予測した社会化指標により生じた疑似相関の可能性は支持された。さらに、社会化指標から精神的健康への影響を分析した重回帰分析の結果において、有意な影響が複数認められた。したがって、社会化指標、精神的健康指標、逸脱行為過去経験の各変数間の関連を整理する因果モデルの分析を行った。その結果、吉澤他(2009)と整合する結果として、反社会的認知スタイルが社会的自己制御の各変数を規定する結果が得られた。また、反社会的認知スタイルは逸脱行為過去経験だけではなく、ウェルビーイングに対して直接的な強い負の影響も認められた。さらに、GHQに対しては、感情・欲求抑制を介する間接的な影響も確認された。

反社会的認知スタイルからウェルビーイングへの直接的影響やGHQへの間接的影響に関しては、認知的側面の問題として解釈が可能である。ウェルビーイングは主観的な幸福感であり、自らの置かれた状態をどのように捉えているかという認知的要因の影響が強い(Diener, 1985)。そのため、GHQよりも強い直接的な関連が認められたものと考えられる。さらに、GHQへの間接的影響に関しては、反社会的認知スタイルの潜在変数を構成する顕在変数は主に希死念慮うつ傾向に強く影響していた(Table 3)。抑うつは認知的な要因と関連が強く(Beck & Clark, 1988)、不適応的な認知スタイルは抑うつを先行するという知見(Metalsky, Abramson, Seligman, Semmel, & Peterson, 1982)もある。こうした知見から、反社会的な認知スタイルが、抑うつという感情障害と密接に関連する感情抑制に問題を生じさせることで、抑うつを症状として顕現化させている可能性が

示唆される。

反社会的認知スタイルは、持続的対処・根気を媒介して、逸脱行為過去経験やウェルビーイングに間接的に影響していた。こうした媒介プロセスは、反社会的認知スタイルによって生じた行動抑制の問題として解釈可能である。反社会的な人物は不適応的な認知傾向を持つがゆえに、計画的な行動をとることに失敗するとされ、その結果として犯罪や非行などの行為に従事することが指摘されている(Gottfredson & Hirschi, 1990)。このように計画的に自らの行動を律することができない自己制御能力の低さは、社会的な不成功につながり、ウェルビーイングを低める可能性も想定される。

本研究では以下の制約がある。第1は、横断調査であることから、変数間の因果関係に限界があるという問題である。個人内の心的過程である社会的情報処理や自己制御が、社会適応の結果である反社会的行動や精神的健康を先行すると仮定することが妥当と考えられたため本研究を実施したが、因果関係をより明確にするためには、縦断調査を計画した研究を実施する必要がある。

第2は、青年期における安定した社会的情報処理スタイルや自己制御能力を測定する目的や、矯正施設の入所経験がなく非行経験の正確な報告が期待されるという理由により、大学生を対象とした問題である。大学生は青年の一部のサンプルでしかなく、本知見を一般化する上で制約がある。したがって、今後は義務教育である中学生以下を対象に、調査方法を工夫した研究の実施が求められる。

これらの制約があるものの、本研究で得られた知見は犯罪者や非行少年における精神的健康を対象とした研究に一石を投ずるものである。反社会的行動に向かいやすい個人差としての心的過程を有する若者は、同時に精神的健康に問題をきたすせい弱性をも有していることを示唆する。教育的な観点からは、犯罪や非行のリスクの高い子どもたちに対して上記の心的過程である社会的情報処理や自己制御を改善する試みが求められるといえ、こうした改善はしいては彼らの精神的健康を高める副次効果を有するも

のである。社会的情報処理の問題は修正が可能であり (e.g., 吉澤・吉田, 2007), 自己制御能力の低さをトレーニングすることの有効性 (Muraven, Baumeister, & Tice, 1999) も指摘されている。社会適応上のリスクを持つ子どもに対して, 教育が貢献できる余地は十分にあるといえよう。

### 引用文献

- Baumeister, R. F., & Vohs, K. D. (Eds.) (2004). *Handbook of self-regulation: Research, theory, and applications*. New York: Guilford Press.
- Beck, A. T., & Clark, D. A. (1988). Anxiety and depression: An information processing perspective. *Anxiety Research*, **1**, 23-36.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
- Diener, E. (1985). Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, **95**, 542-575.
- Dodge, K. A., & Pettit, G. S. (2003). A biopsychosocial model of the development of chronic conduct problems in adolescence. *Developmental Psychology*, **39**, 349-371.
- Dodge, K. A., Pettit, G. S., McClasky, C. L., & Brown, M. M. (1986). Social competence in children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, No.213. (Vol. 51, No. 2)
- 藤野京子 (1996). 非行少年のストレスについて 教育心理学研究, **44**, 278-286.
- Goldberg, D. P. (1978). *The General Health Questionnaire*. London: GL Assessment Limited.
- (ゴールドバーグ, D. P. (1985). 日本版GHQ精神健康調査票手引 (中川泰彬・大坊郁夫 訳) 日本文化科学社)
- Gottfredson, M. R., & Hirschi, T. (1990). *A general theory of crime*. Stanford, CA: Stanford University Press. (ゴットフレッドソン, M. R., & ハーシ, T. (1996). 犯罪の基礎理論 (松本忠久訳) 文憲堂)
- Gough, G. H. (1957). *Manual for the California Psychological Inventory*. 1st ed. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- (ゴーフ, G. H. (1967). カリフォルニア人格検査 (CPI) 実施手引き (我妻 洋・川口茂雄・白倉健二訳) 誠信書房)
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008). 社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成—妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連— パーソナリティ研究, **17**, 82-94.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2009). 自己制御が社会的迷惑行為および逸脱行為に及ぼす影響—気質レベルと能力レベルからの検討— 実験社会心理学研究, **48**, 122-136.
- Harrington, R., Rutter, M., & Fombonne, E. (1996). Developmental pathways in depression: Multiple meanings, antecedents, and endpoints. *Development and Psychopathology*, **8**, 601-616.
- 法務省法務総合研究所 (2005). 平成17年版 犯罪白書 国立印刷局
- 法務省法務総合研究所 (2011). 平成23年版 犯罪白書 国立印刷局
- Ireland, J. L., Boustead, R., & Ireland, C. A. (2005). Coping style and psychological health among adolescent prisoners: A study of young and juvenile offenders. *Journal of Adolescence*, **28**, 411-423.
- Kim, K. J., Conger, R. D., Elder, G. H., & Lorenz, F. O. (2003). Reciprocal influence between stressful life events and adolescent internalizing and externalizing problems. *Child Development*, **74**, 127-143.
- Metalsky, G. I., Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., Semmel, A., & Peterson, C. R. (1982). Attributional styles and life events in the classroom: Vulnerability and invulnerability to depressive mood reactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 612-617.
- Muraven, M., Baumeister, R. F., & Tice, D. M. (1999). Longitudinal improvement of self-regulation through practice: Building self-control strength through repeated exercise. *Journal of Social Psychology*, **139**, 446-457.
- 小保方晶子・無藤 隆 (2005). 中学生の非行傾向行



- 為と抑うつ傾向の関連 心理臨床学研究, **23**, 533-545.
- 小保方晶子・無藤 隆 (2006). 中学生の非行傾向行為と抑うつ傾向の関連について—ストレスとコーピングからの検討— お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, **3**, 65-73.
- 吉澤寛之・吉田俊和 (2003). 社会的ルールの知識構造と社会的逸脱行為傾向との関連—知識構造の測定法を中心として— 犯罪心理学研究, **41**(2), 37-52.
- 吉澤寛之・吉田俊和 (2004). 社会的ルールの知識構造から予測される社会的逸脱行為傾向—知識構造測定法の簡易化と認知的歪曲による媒介過程の検討— 社会心理学研究, **20**, 106-123.
- 吉澤寛之・吉田俊和 (2007). 社会的情報処理の適応性を促進する心理教育プログラムの効果—中学生に対する実践研究— 犯罪心理学研究, **45**(2), 17-36.
- 吉澤寛之・吉田俊和・原田知佳・海上智昭・朴 賢晶・中島 誠・尾関美喜 (2009). 社会環境が反社会的行動に及ぼす影響—社会化と日常活動による媒介モデル— 心理学研究, **80**, 33-41.
- Young, S. E., Mikulich, S. K., Goodwin, M. B., Hardy, J., Martin, C. L., Zoccolillo, M. S., & Crowley, T. J. (1995). Treated delinquent boys' substance use: Onset, pattern, relationship to conduct and mood disorders. *Drug and Alcohol Dependence*, **37**, 149-162.
- Zelli, A., & Dodge, K. A. (1999). Personality development from the bottom up. In D. Cervone & Y. Shoda (Eds.), *The coherence of personality: Social-cognitive bases of consistency, variability, and organization*. New York: Guilford Press. pp. 94-126.

